

## 藤村と鮫島晋・

### 「貧しい理学士」をめぐる

#### ——一つの文学的肖像の終焉——

瓜 生 清

小説『新生』を論じながら藤村を「恐るべき『反芻動物』」と評したのは亀井勝一郎である。この評言は、藤村の特異な資質を鋭く洞察した大変興味深い指摘であると思うが、ことは『新生』一作にかぎるまい。自己と血族を祖上にのぼして倦むことをしらない自伝的文学の体系化の過程を指して「反芻動物」と評することも可能なのである。このような粘着的な凝視が文学において自覚的に試みられた時、石塚友二氏<sup>(註)</sup>が指摘する素材・表現上の「一事反覆」の現象となつて出てくることは言うまでもあるまい。例えば、「貧しい理学士」(初出では「斎藤先生」、「太陽」大9・4)のモデルで、かつて小諸義塾の同僚であつた鮫島晋という特定の知友に對しても、執拗な「反芻」が持続しており、その結果、鮫島を描く小説はかなりの数にのぼっているのである。これは「一事反覆」の最も典型的な事例と言えるのではなからうか。

本論では、鮫島について単なる親愛の感情を超える関心が持続した理由を「一事反覆」の具体相から追跡し、その帰結点としての「貧しい理学士」の位置について考えてみたい。円熟した珠玉の佳作を多く収める短篇集『嵐』(新潮社 昭2・1・1)の中で、決して秀抜な作品とは言いがたい「貧しい理学士」をあえて論題に設定するゆえんである。

#### (一)

鮫島晋(大6・12・9没<sup>(註)</sup>)と「ある女の生涯」(「新潮」大10・7)のモデル長姉高瀬その(大9・3・13没)は、偶然的暗合であるが、ともに六十五歳の艱難な生涯を閉じている。両作品が、短篇集『嵐』の中で不遇な生を終えた故人に送る挽歌をモチーフにしていることは言うまでもない。とともに、奇しくも享年を同じくすること親しい知友・近親者が、藤村に終始注視を強いる存在であつたことに興味をひかれるのである。藤村は「ある女の生涯」のモデルを「家」に「お種」の仮名で、「夜明け前」に「お糸」として描き続けなければならなかつた動機について「写しても写しても尽せないやうなものがその人の生涯からにじむやうに出て来て居るためであつた」(「小説集『春待つ宿』附記」昭13・9)と述べて、万感の思いを込めて哀悼したことがあつたが、「写しても尽せない」という「ある女の生涯」のモチーフに家と血統という藤村文学の回避できない根源的な問題の追究が託されていたのも説くまでもなからう。この重い課題には比すべくもないが、「貧しい理学士」にも、作品の表層を色どる追慕の感情の根底にあって、再三再四その存在に凝視を強いる藤村文学の避けがたい問題が潜在していたのである。

因みに、渡辺光秋の「S理学士と島崎先生」(「文章倶楽部」昭2・4)という回想は、鮫島の生涯を豊富なエピソードを織りまぜながら克明に伝える資料として重視されるが、「貧しい理学士」を執筆する直接的「動因」<sup>(註)</sup>として、藤村が鮫島が没した後、小諸で一別以来再会の機会を得なかつた未亡人と偶然邂逅した事実をあげ、その時の「感銘」をモチーフの現実的契機と想定している。小説の冒頭が、この予期せぬ出会いに触発されて往時をしのび、故人を追

想する形で書き始められているので、渡辺の推論にも一理あることは否定できない。だが、やはり藤村はなぜ鯨島存在に異例と言っても過言でないこだわりを続けたのかを探る方が肝要であろう。

そこで、先ず後年の「定本版藤村文庫」第六篇「苗代集附記（昭13・5）」の作者自注に注目し、藤村文学にしめる「貧しい理学士」の位置を探る一助にしたい。

「河岸の家」は明治四十二年に雑誌「趣味」に寄せた作。「趣味」は西本君といふ人の経営で文学趣味のゆたかな好い雑誌であった。ずつと後になつてわたしは「貧しい理学士」を書いたが、この「河岸の家」もわたしの内部を流れてゐるものゝあらはれの一つと言へようかと思ふ。

この自注が書かれたのは昭和十三年である。遙か後年の自作解説に依拠することには当然慎重であるべきであらう。だが、少なくともこの自注は、「貧しい理学士」がその長い文学的営為を取捨した自撰の全集にいかなる意味で収録されたかを語る資料として注目してよいのである。この自注を読むと、その大半が「河岸の家」（「趣味」明42・8）の説明に割かれているために、肝腎な「貧しい理学士」を位置づける焦点が明らかではなく、藤村の真意が正確に伝わって来ないもどかしさが残る。ともかくも、文脈を忠実にたどつてゆくと、「河岸の家」と同様に、「貧しい理学士」も「わたしの内部を流れてゐるものゝあらはれ」と規定されていることに疑問はあるまい。両作品が長い文学的道程を通じて心情の奥に絶えず貫流し続けるモチーフの発現であつたという定義は重大である。この定義を明らかにするために、少しく煩雑ではあるが、先ず順序として「河岸の家」について触れておく。

これは、少年時代から厚い恩顧を受けた吉村忠道の失意の晩年を描いた短篇で、とりたてて問題とすべき内容の作品とも思われない。ゆえに、一見意味ありげにしか思われない作者自注は奇異な感を与える。そこで、吉村忠道との関係を描いた作品にまで視野を広げてみると、その恩義ある関係の呪縛からいかに自己を貫ぬいてゆくかという青年期の自己確立の問題が、「雜貨店」（『新潮』明42・7）、「桜の実の熟する時」（大8・1・1）などに追究されているが、藤村が自注で語ろうとした核心は、長く恩義を感じ続けていた濃密な関係意識を表白しているだけではあるまい。「河岸の家」によると、「私」は幼少の頃からのなつかしい記憶の土地である神田川のとりに居を移そうとしている。これは、明治三十九年十月二日藤村が浅草新片町に転居した実生活上の事実と符合するが、隅田川に包摂されるその河岸沿いは、その後『海へ』（大7・7）など様々な作品に、明治以降の時代の激しい変遷を照らし出す背景として選ばとられているのである。いわば藤村文学に頻出するこの河岸は、個の生活史を追憶しながら、時代の推移を觀望し批評する場として、文明批評家藤村がしばしば回歸してゆく重要な人風景Vであつたのである。外に向けられた文明批評の広がりに関係する「河岸の家」の（風景）は、たしかに藤村文学を貫いている主要なテーマにつながる。

では、前記自注の同じコンテキストの中に置かれた「貧しい理学士」は、いかなる意味で彼の「内部を流れてゐるものゝあらはれ」であるかが検討されなければならないだろう。

藤村が鯨島と深交を結ぶことになる機縁は、彼が小諸義塾に赴任する明治三十二年四月に遡る。そのうち、大正六年十二月九日に鯨島が死去するまで、逆境にあえぐ老学士との親密な交渉は、神津猛・土屋総蔵に宛てた現存書簡（註）にたどられる。

鮫島と親交が深まってゆく過程と並行して、その風貌を借りた文学的形象は、先ず『破戒』（明39・3・25）の「風間敬之進」に生形を帯びた造型となって結晶する。その後「収獲」（『文章世界』明41・10）の「佐々木先生」、「苦しき人々」（『文章世界』明42・1）の「広岡老人」を経て、『千曲川のスケッチ』（大元・12・20）に収める「古城の初夏」・「田舎牧師」の「理学士」、「岩石の間」（『中央公論』大元・9）・「突貫」（『太陽』大2・1）に「広岡理学士」という仮名で登場し、作中にしめるモデルの比重は必ずしも一様ではないが、「貧しい理学士」まで鮫島とのかかわりを絶えることなく描き続けて来たことになる。「貧しい理学士」は、時間の流れに沿ってそれら一連の作品を小説に組みこみ集大成した短篇で、鮫島と交渉が始まってからその終焉までの「十九年近くの歲月」（『貧しい理学士』）を見渡した総括的作品と言ってよい。このうち、鮫島晋について追究してきた問題は終止符を打たれたかのように、その文学的肖像は描かれることがなかったのである。

## (二)

「貧しい理学士」は、「私」がいまは亡き鮫島に「先生」と呼びかけ、その生涯を追慕するスタイルをとる。作品によると、「私」が「先生」と昵懇の間柄になるきっかけについて、ともに居所が近いことから旅行好きであることなど、趣味・好尚に渡って種々一致点があげつくされているが、結局のところ、これらは二人が接触を強めてゆく外面的な要因をあげたに過ぎないだろう。「私」が選かれたように「先生」に視線を釘づけにされる真の理由は、「先生」の内面に巣くっている問題との共鳴をにおいて外にあるまい。例えば、

「私」が居酒屋で「先生」と同席し、綿々といつ尽きるとも知れない愚痴まじりの述懐に黙して聞いている印象深い場面がある。

一口やると、先生の口からそろ／＼出て来るものは愚痴でしただ。私がまた先生の話に引きつけられて行くのもその愚痴でしただ。以下、後略の箇所に、兄弟をめぐる夫婦間の軋轢や、多くの子供をかかえた「貧苦」を訴える件りが続くわけだが、興味深いことは、この生活の痛苦を酒に紛らす述懐場面が、『破戒』第四章第六節及び第十六章第六節の風間敬之進のそれと符合しているのである。そのほか「岩石の間」にも同一表現がある。発表時期を異にしながら、「貧苦」をめぐる執拗な追究がくりかえされていることは、単に想像力の欠如と断じてすませるわけにはゆくまい。この典型的な「一事反覆」に、藤村が追究しようとしたテーマを示唆するものがひそんでいるだろう。

作中の両者の関係から問題を帰納すると次のようになる。「先生」が帰って行つた後で、何時でも先生の後に残して置いて行くものは、打勝ちがたいやうな貧苦の恫しきでした」とあるように、あえぐやうな人生の酸苦の訴えに持ちきっている確かな存在を前にしては、生活智という合理的処世を色あせさせる「打勝ちがたい貧苦」の重さを不条理な人生の発現として受けとめている藤村の視線がうかがえるのである。

藤村がこのような生活問題に厳粛に対峙しようとしたのは早く、鮫島と深交を結んだ七年に及ぶ「山上生活」を要約した結論と言える「予は教師として行き生徒として帰つた」という『緑葉集』（明40・1・1）序の自己規定が証明しているし、この発言の確かさは『破戒』において風間敬之進一家の窮状を丹念に追究しようとした

意図でも裏づけられる。

藤村が『破戒』の構想を確定し執筆にとりかかった時期は、明治三十八年三月五日付神津猛宛書簡などから推測して、前年の明治三十七年三・四月の交と考えられる。<sup>(註3)</sup> ちょうどその時期に「貧苦」(『白金季報』明37・3)と題するエッセイを発表しているのである。このエッセイは、「破戒」その他に「貧苦」をめぐる一連の「一事反覆」が試みられていたことに明らかなように、深く生活の実相を問ひなおす一貫した志向と鯨島をモデルにした風聞敬之進像との相関関係を考える上で示唆する。とともに、そのち盛んに論議される自然主義文学の性格規定について、否定的人生図を提示するという方向に議論が収斂する以前に、藤村の自覚的な発問であったことを明らかにする資料としても注目されるのである。

貧苦は芸術を産むと共に罪惡をも産めり。貧苦の産みし芸術は人生の慰藉にして、また貧苦の産みし罪惡は社会の哀史なり。貧苦は真に味ふべきこと多し。たゞこれに処するの道を難しとするのみ。

「貧苦」の第五章の一節であるが、ここに生活の実相を問ひかへす文学的志向が「貧苦」のはらむ人生・文学上の正と負の関係を見極めようとするものになっているのは言うまでもない。この趣旨を『破戒』に照合すると、人生の殘殘者風聞敬之進と前途多望の瀬川丑松を対照させ「貧苦の恐るべきは、人を束縛する力あるにあり」(「貧苦」という人間をスポイルする精神の腐蝕過程を風聞敬之進に具象しながら、その「不自然なる束縛」(同上)に抗しながら、いかにして「精神の活動」(同上)を得るかという問いかけが試みられていたのである。

『破戒』の中で、零落のために一家離散の悲運に襲われる敬之進

一家の比重は、ただに無垢の丑松を圍繞する苛烈な運命の縁どりとして機能しているだけでは勿論ない。そこには、「酷烈<sup>きりつ</sup>しい、犯し難い社会の威力」(『破戒』第十五章第一節)の実態を強調する一挿話の域を超える重い追究が見られるのである。丑松を敬之進との関係で説明すると、彼はその一家の窮状をつぶさに見る唯一の目撃者である。その最も顕著な箇所は、收穫(第四章)と年貢(第十六章)の場面を目にする丑松が、両章で居酒屋において敬之進と偶然邂逅する設定を用意しているところである。つまり、丑松が人間の精神を萎靡させる「貧苦」の実相を體現した敬之進を親しく目撃する構図において、いかに「精神の活動」の回復は可能かという追究が反映していることにはかならない。

しかし、すでに越智治雄氏が指摘しているように、『破戒』の終結部、丑松が梗塞した自我の解放を得るために告白を決意し心理的救済がはたされる過程で、敬之進像の指示する問題は丑松の自己救済の視野からはずれ急速に遠ざかってゆく。零落に恐怖する丑松は、初めて敬之進の痛苦の現実にも接近したわけだが、そこから運命の微笑にたどりつく「精神の活動」の回復は、その自己救済の理念が現実にとる形態としてテキサスに移住する解決策を想起するまでもなく、敬之進の指示する問題に見合う確たる方途の指示たり得ていないのである。このような救済を結果した事情の一端は、次のようなところに求められよう。エッセイ「貧苦」は、その対処法として芭蕉の「紙衾の記」を引用し、動ずることのない「修養」の必要を説いていたが、そこにあらわな精神主義的観念性は、生活の実相から脱落した丑松の内面の解放感とパラレルであるとともに、丑松と敬之進の関係を生活の相において問ひつめてゆく小説の構造的発展性を閉ざしてしまう結果になったのである。

『破戒』では未解決のまま放置された課題は、『破戒』の反響をふまえ、文壇の新しい動向を見通した「緑蔭雑話」(「読売新聞」明39・4・9)で「従来小説等には全然看過されて居た生活問題の如きも、将来は甚深な關係を以て描かれるでありませう」と予測させることになる。これは、島村抱月がその『破戒』評で「近世自然派の問題的作品」(「早稻田文学」明39・5)と対等の発現であると過褒したように『破戒』における「種々なる生活状態」(『破戒』広告文「新小説」明39・3)の中でも、風聞敬之進一家に示された生活問題が、人間の精神においていかに暴威をふるう甚深な問題であるかに先鞭をつけた自負心に支えられているのである。とともに、それが彼自身にとっても依然として甚深な課題であったことは、『破戒』について見て来たことから明らかにあらう。

ただ、ここで補足して置きたいことは、『緑蔭雑話』は、目下の自然主義文学の動向を「積極」・「消極」の二局面として簡明に整理し、人生の廢殘者を描く国木田独歩の「すたり者」の文学に對して、暗に『破戒』の意図の「積極」性を誇負する口吻となつてゐるのである。このような自恃の発言が出る事情は、風聞敬之進像に對する遍向した同時代の理解も關係していたのである。独歩の『運命』(明39・3)と『破戒』をあわせ論評した批評に、前記『破戒』第四章第六節の敬之進の述懐場面にある「君は碌々といふ言葉の内に、どれほどの酸苦が入つて居ると考へる」という一節に注目し、『破戒』の主眼目を「著者の画かんとしたる所は正に「碌々たる者の酸苦」であらうと推量する」と論じて、風聞敬之進造型のリアリティを称揚し共感を寄せる論評が見られるのである。このような「幻滅時代の芸術」(長谷川天溪「太陽」明39・10)にふさわしい方向で敬之進のリアリティを評価する理解が、藤村の志向を正當にと

らえたものでなかったのは言うまでもあるまい。そのような遍向に對して『緑蔭雑話』は、『破戒』が「貧苦」の問題をめぐるても否定的人生図の形象・確認にとどまらない人種極端Vの対決の意図を持ち、それが今後の課題でもある展望になつてゐたことを銘記しなければならぬのである。ここに、以後の鮫島に關する「一事反覆」の起点があつたのである。

『破戒』後も「修養」という觀念が生きていたことは、『貧い境遇に處する場合があつても、其貧いうちに心の動かないところを見つけて、飽く迄も抵抗する』必要を説く「女子と修養」(「新片町より」所収 明42・9・22)の一文にも知られるが、ようやくその間に内容を持った新たな展開を示し始めていた。『春』を「東京朝日新聞」に連載するため執筆に専念してゐた明治四十年歲晩の頃の鮫島の困窮を伝える「苦しみ人々」や、その辛酸の生涯の終わりに、ようやく「十年も二十年もかゝつて蒔いた種が漸く実を結ぶ時節」を迎えたかのように新しい赴任地を得たことを祝す「収穫」など、作風の明暗に違ひはあるが、「貧苦」の重さを共有しながら新しい対処が胚胎し始めていたのである。それは、潑刺とした精神を枯渴させ倦怠と懶惰に陥らせる單調な日常性を問い、その錯雜としてゐるがゆえに深く危機を内在している生活相に意志的に対処する根柢をもつた「簡易生活」(「江戸趣味と田舎趣味」『学生タイムス』明40・2)という生活信条に深められた。これは座右銘でもあつた「簡素」という語とともに藤村の生涯を貫く基本的理念と言えるのである。

### (三)

ところで、「貧しい理学士」とそれ以前の作品を比較すると作品の基調に大きな変化が認められるのである。例えば、「何処迄が老

人の逆境で、何処迄が私の艱難であるか、次第に差別の付かないやうなものに思はれて来た」という一文は、「苦しみ人々」の一節であるが、「貧しい理学士」にも殆んど同文と言ってよい酷似した箇所がある。「苦しみ人々」は「貧苦」の重さを共有していかんともしがたい苦澁を嘆嘆する人生のいたまじさを率直なモチーフとする。

しかし、同文を含む「貧しい理学士」は伸びやかな文体を持ち、内容も陰鬱な晦渋さを払拭し、清澄なモデルの対象化を示して従前の作品とその作風を大きく異にする。両者の間には、鮫島に追究して来た問題について藤村に何らかの内的な変化が起こっていたと想定しなければ説明のつかない作風の不連続がある。この作風の断絶感には、「岩石の間」など他の作品によっても証明される。

「岩石の間」は新生事件の渦中であって、現在の暗澹とした心理の閉塞情況が過去遡及を試みた短篇であるが、これは、都会の喧騒を離れ主体を甦生させようとする当初の意欲が、漸次その意に反して寂寥とした情況に包まれ全くの田舎漢に化してゆく精神史を描いたもので、そのためその作風は、従前からの「貧苦」の共有関係から来る苦澁感を相乗させ、陰鬱の度を一層強めているのである。「岩石の間」と同時期の短篇で、「貧しい理学士」と同じ死者との対話のスタイルを持つ「沈黙」(「中央公論」大2・2)の存在もその例証に加えられる。「貧しい理学士」の対話形式は、「先生」の死を「勝田」(注 斎藤緑雨)の「寂しい葬式」と重ねて回顧していることから明らかなように、かつて緑雨との交遊を描いた小説「沈黙」のスタイルを意識しているのである。「沈黙」は、永遠に遠ざけられた死者が「私」の「寂寞」を極めた心情を介して生き々と蘇ってくる小説で、対象との間に強い心理的共鳴をおぼえる場合

に試みられた方法であった。同じ死者に呼びかける形式をとりながら、「沈黙」が所謂新生事件の渦中であって暗澹とした心情に塗られてめられた自己確認を通して、寂寞をきわめた緑雨の孤獨な内面についてあらたな発見を語ろうとしたのに対して、「貧しい理学士」は老残の生涯を閉じた故人を自在にのびやかに回想してその色調を大きく異にする。「岩石の間」・「沈黙」等については、当然新生事件下の情況の反映を考慮しなければならないが、やはりその断絶感は異様に大きいのである。

さらに、「貧しい理学士」に顕著な伸びやかな追想についてであるが、死という冷徹な事実で関係を絶たれた存在は、生き残った語り手の追慕の感情によって自由に限取られることにもなり易いわけで、同時代評で芥川龍之介が「貧しい理学士」に「低回趣味」を見いだしているのも、死者に向けられた放恣な追慕の情のゆらぎを指した理解と見てよい。確かに「貧しい理学士」の追慕の情のあり様は、芥川が指摘する一面があることを否定できないが、それだけであろうかという疑問も消したいのである。例えば、瀬沼茂樹氏がこの追慕を支える内面に目を向けて「落魄した孤独な生涯を描いてしみじみとした温味をみせている。作者の『新生』後の心境の有り方を現している」と述べた理解は多くの示唆を与える。

つまり、「理学士」としての先生が最早物の理を究めようとする心も持たない(「貧しい理学士」)ようになり果てた姿は、貧と老に疲弊し「精神の活動」を喪失した人間の残酷な結論と言える。その意気沮喪した萎縮に対して、それを超克する心境の確かな胎動が予感されることによって、初めて「貧しい理学士」は従来の作風と明らかに一線を画した文体・内容の作品たり得たのではないか。

(四)

「貧しい理学士」が発表された大正九年、藤村は文壇の長い僚友であつた花袋・秋声の誕辰五十年を祝い、その記念事業として出版された『現代小説選集』(大9・11)の編者の勞をとることになる。そして、自身「太陽」に発表した「斎藤先生」を「貧しい理学士」と改題して記念出版に寄せることになつたわけだが、それはただかりそめの祝意の表明だけであらうか。藤村は「現代小説選集序」で僚友に触れ「夢は長く、行く路は難い」とも記しているが、鮫島・長姉その等、知友・近親の死に加えて、この僚友の祝賀は人生の区切りを自覚し、新しい節目への静かな決意を喚起させていたのではないか。それは、『新生』発表後の退隱生活の中で、漸次意志的強壯な壮年から老年への関心が深まり始めていた事実から証明される。ちょうどこの時期、感想集『飯倉だより』(アルス 大11・9・5)の巻頭に置かれた「三人の訪問者」(「開拓者」大8・1)や「老年」(「飯倉だより」所収)などに豊饒な老年の可能性を見つめ、それに徹しようとする覚悟を語り始めるエッセイがあることで裏付けられる。

「老年」は次のような短章である。

老年は私が達したいと思ふ理想境だ。今更私は若くなりたいたいぞと望まない。どうかして、ほんたうに年をとりたいものだと思ふ。十人の九人までは、年をとらないで萎れてしまふ。その中の一人だけが僅かに眞の老年に達し得るかと思ふ。

あらだに「老」を生る萎縮ではない成熟への道程と見る信念が自覚され始めた時、老熟した「晩秋の静かさ」に達することが出来なかつた鮫島の老残の死を眞に葬送する資格を手にしたのである。

「貧しい理学士」は、「私」によって従来の作品になかつた「眞の老年」を志向する観点が導入される。その結果、作品に登場する三様の老年は、その観点によって鮮明な批評を受けることになつていたのである。「理科大学」を卒業した知的選良である「先生」は、そのかがやかしい過去の経歴にふさわしい処遇を得ない怠慢が内攻しており、それが酒に沈溺させ、朝顔の培養をわずかに憂悶を忘れさせる心遣りにする。「老鸛の我と我が鳴音を忍ぶやうな風情」の「先生」は、未来は意志的に切り開かれる可能性とならず、現在はまだ痛苦の対象に過ぎない。結局のところ、残るものは、はなやかな過去への退嬰的な思い出のみが生の実感をあざやかにかきたて生き続けることになる。生活に屈服させられた「先生」に対して好対照をなすのが、男性的な雄志を押えかねている塾長の「桜井」である。しかし、「桜井」は節を屈することを屑しとしない「戦の人」であるがゆえに、人生を結実させる隱忍に欠け、ついに永遠の「播種者」<sup>たねまき</sup>に終わらざるを得ない。その他、幹事の「正木」も、老年を成熟への道程と見ず、いたずらに抗するばかりで業なかばにして倒れる。「貧しい理学士」は、これら不遇な三様の生を描いて、豊かな老年の實在を夢想する藤村の批評たり得ているのである。このように、「貧しい理学士」に著しい暖かい感情移入による清澄な故人の鎮魂は、「眞の老年」への意欲が胚胎することによって可能になつたのである。無言な死者である「先生」の様々な記憶を「尊い記念」の語に封じ哀別するところに、鮫島をモデルに描き続けて来た「一事反覆」の帰結が暗示されているのである。エッセイ「貧苦」と『破戒』の「風間敬之進」から「老年」と「貧しい理学士」の「先生」にいたる過程は、生活者の文学とも評される藤村の格闘史でもあり、その果てによりやく終結点がほの見え始めていたのである。

注

- 1 亀井勝一郎『島崎藤村論』（新潮社 昭28・12）216頁参照。
- 2 石塚友二「一事反覆」（『藤村全集』月報5 筑摩書房 昭42・1）。なお、この論は「旧主人」（『新小説』明35・11）と「華公人」（『女子文壇』明42・8）、「家畜」（『中央公論』明39・10）と「芽生」（『中央公論』明42・10）に見られる同一表現に着目し「一事反覆」という特徴を指摘したものであるが、鮫島に關する一連の追究もこの「一事反覆」に加えられるのは言うまでもない。
- 3 鮫島晋の没年は従来明らかではなかったが、上原政雄「木村熊二と小諸義塾」（『信州白樺』第17号 昭50・4）の調査に依拠する。
- 4 渡辺の論は、諸種の藤村参考文献目録に記載がないが、その存在は早く瀬沼茂樹が『島崎藤村―その生涯と作品』（塙書房 昭28・1、及び『角川文庫』の増補版 昭32・5）で指摘していることを付記する。
- 5 『微風』（大2・4・18）に収める「柳橋スケッチ」の其三「柳橋」のほか、『海へ』（大7・7・10）の第五章「故国に帰る」の第二十節、『嵐』（昭2・1・1）に収録する「子に送る手紙」の「三」等を参照。
- 6 小諸在住時の両者の交渉は、「貧しい理学士」のほか「岩石の間」にも語られているが、上京後の鮫島の動静を伝える資料として、明38・6・7、明39・10・16、明40・5・21、明40・11・21、明42・1・31（いずれも神津猛宛）、明45・6・21、大6・12・21（いずれも土屋総蔵宛）の日付を持った書簡がある。

7

明治三十八年三月五日付神津猛宛書簡は、『破戒』に着手した時期にふれて「今回の長篇を構成せむと思立ちし当時は、大凡一年（則ちこの四月まで）の見込」とある。その信憑性は「神津猛日記」（『藤村全集』別巻 筑摩書房 昭46・5・30）の明治三十七年十二月十七日の件りに「氏は本年四月以来執筆中の長篇小説について色々語ってくれた」とあって補強される。

なお、野村喬氏は「収獲」なるものにつき」（『国語と国文学』昭32・5）という論文で、明治三十六年十一月十九日付田山花袋に宛てた書簡が、借覧したドストエフスキイの「罪と罰」の読了を伝えるとともに「収獲はまだ筆もとらず、稿も起さず」と述べていることに注目し、「破戒」の構想が確定する以前に、風間敬之進一家を中心にした小説の計画が「収獲」の題名で考えられていたのではないかという興味ある推論を展開している。鮫島については、異例な「一事反覆」が行なわれていることから野村氏の見解は一層興味深くなるのだが、書簡に見える「収獲」の語には括弧は付されておらず、これを作品名と速断することは出来まい。なぜなら、この時期、野村氏が推論した構想とは別に「収獲」の語に相当する小説の腹案があった事実がある。この花袋宛書簡が発信された直後、あくる明治三十七年一月五日、花袋は藤村の再三の勧めに応じて嚴冬の小諸を訪ねる。その時の花袋の紀行「山上の思ひ出」（のち『緑葉集』の巻末に付載される）によると、深更に及ぶ歓談の中で、藤村は近代小説の取材領域からしめ出されていた山中生活の妙趣を説いて「山番の生活は最も深く興を惹きて、早晚一作品たるの時あるべし」と述べ、「山番」を描く創作の腹案があったのである。これは、歓談がおのずとピロ



## 新刊紹介

### 山田輝彦著『夏目漱石の文学』

この著書は漱石の主要作品をほぼ全て取りあげて論じ、漱石文学への一つの視点を提示したものである。収める論文は十一篇。その題目を示せば、「作家漱石の出発―『猫』『漱虚集』を中心に」「草枕」ノート―その創作動機を中心として―」「眞美人草」論―道義と詩趣―」「三四郎」論―低徊家の変貌―」「それから」論―その道德感を中心に―」「門」覚書―いわゆる「日常性の原理」をめぐる―」「彼岸過迄」論―敬太郎の冒険―」「行人」私論―「こゝろ」試論―明治への鎮魂歌―」「道草」ノート―「明暗」私論―である。

著者は「あとがき」に「外圧によって強いられた日本の『近代』の顔を、彼ほどトータルな形で描いた作家は稀有である。特に、戦後の漱石研究の領域から意識的に排除されていた『ナショナリズム』の視点を導入しなければ、全円的な漱石像の構築は不可能ではないか」と書かれている。この点がまさに本書の一大特色である。「明治の文人が共有した天下国家への熱い関心」―そのような明治という時代の中に漱石の文学を据えて、作品の持つ意味を捉えようというのが、著者の基本的な姿勢である。作品を自己に引き付けて論ずることの多い中で、研究としては最も正統たるべき方法である。「こゝろ」試論」はその方法が最も有効にはたらいいて感銘が深い。本書を読むと、改めて漱石を読みなおしてみようという思いがする。

(昭和五十九年一月 桜楓社刊 四八〇〇円)

ルソンの山嶽小説『アルネ』にふれ、藤村がその感銘を熱っぽく語った後にもたらされた計画であったことから創作の意欲を信じさせる。因みに、『アルネ』についての関心は早く、明治三十四年十月二十六日付田山花袋宛書簡にまで遡る。ただ、「山番」を描く計画は実現せず小説として見るのが出来ないが、既に創作に踏みきらせるに足る取材がかなり精力的に行なわれていたことは、二度に渡って出掛けた見聞が、『千曲川のスケッチ』其五の「山中生活」・「山番」及び其八の「松林の奥」・「深山の燈影」・「山の上の朝飯」などのスケッチとして残っておりこのスケッチを踏まえた作品の構想を花袋宛書簡で「収獲」としてもらっていた可能性も否定できないのである。ここでは鮫島に関する「一事反覆」の具体相を追究することを目的としているので、前述の「収獲」という小説の構想の存否については立ち入らない。

8 越智治雄氏は「破戒」(三好行雄編『島崎藤村必携』学燈社 昭42・7)で、敬之進同様の零落に直面した丑松のその後の去就について「しかし、丑松の新生涯はそうした地点をしかと踏まえることから開けてきたように印象づけられていない。死から生への転換の際、丑松はほとんどその地点から身をひるがえすかのこ

とくでもある」と指摘している。

9 煙霞生「『運命』と『破戒』」(『中央公論』明39・6)

10 芥川龍之介は「四月の月評」(『東京日々新聞』大9・4・11)

で「島崎藤村氏の『斎藤先生』(太陽)は、安らかに筆を運んで行く所に、さすがに大家らしい落ち着きはある。と同時に僕などには余り羨ましくない低回趣味もある」と評している。

11 瀬沼茂樹『評伝島崎藤村』(筑摩書房 昭56・10) 265頁参照。